

「サガフォンド村・ネットカフェ計画」誕生のこぼれ話

この文章へたどり着いてくださったみなさん、フォーフォー！

フォーフォー！とは、ニジェールにいるザルマ族という民族が使うザルマ語で「こんにちは」そして「ありがとう」という意味です。

これから、サガフォンド村のネットカフェ計画について、もう少し詳しく知りたい方のために計画誕生の経緯などをお話ししていきたいと思います。

2009年2月、私は国際協力機構（JICA）の青年海外協力隊としての、正式な合格通知をいただきました。郵送されてきた合格通知とともに、派遣の要請書類に書かれていた国名は「ニジェール」。「・・・ってどこ！！？？」ベトナムやネパールなど、アジアの国々に希望を出していた私は、その時「ニジェール」という国の場所さえ知らず、思わず一人でつぶやいていました。

コモン・ニジェールの代表理事をされている福田英子さんは、私が小学校5年生のころから中学、高校3年生まで同級生だった“福ちゃん”のお母さんです。福ちゃんは、小5で転校してきた時、フランス帰りで、しかも小3までなにやら砂漠の国で暮らしていたらしい、ということで、当時から独特の雰囲気を出していましたが、ものごし穏やかで皆に好かれる人でした。そうかと思うと、あえて主流に乗らないようなところがあったり、数学のテストでもものすごくいい点数を取ったと思ったら、次のテストは赤点ぎりぎりだったりして（私の記憶ではそういうことになっています）「気まぐれなひとだなあ」と、同じく気まぐれな私は親近感を持っていました。

福田さんと私の母は、私や福ちゃんが小学校の5年生の時、担任の先生との父母面談を待つ廊下で知り合ったそうです。母は、あこがれのパリに暮らした経験を持つ福田さんと意気投合し、2人はお互いの家を行き来するなど、親しくなりました。それから私が大学生になったころには、うちが引っ越しをして家が遠くなったことや、子供たちが高校を卒業して学校で会うこともなくなったことなどもあり、数年間、会う機会がなく時間が過ぎていました。

私が協力隊員としてニジェールに行くことが決まった2009年のある日、私の母は、ふと、「福田さんどうしているかしら？」と久しぶりに連絡を取りました。そして、母が「娘が近々ニジェールに行く」という話をすると、福田さんが「私もニジェールにいたのよ！」と答え、2人ともあまりの偶然にびっくり仰天だったそうです。（母は、福田さんがサハラ砂漠で暮らしていたことは知っていましたが、ニジェールという国にいたことまでは知らなかったそうです）

さらにちょうどその年の春、福田さんがコモン・ニジェルを立ち上げた時でした。

私の協力隊参加、そして希望してもいない派遣国、母の連絡、コモン・ニジェル立ち上げのタイミング・・・不思議にもさまざまな偶然が絡み合い、「縁」になった瞬間でした。

それから、福田さんは団体立ち上げ初年の忙しい時を送られていました。私も9月にニジェルに派遣され、電気・水道のないサガフォンド村の土の家で暮らす生活をはじめ、現地の生活に慣れることに懸命な日々を送っていました。

現地の生活にも慣れ始め、「ここで自分に何ができるだろうか」と模索していた2010年の春、「電気のお返しは電気で」プロジェクトを進めていた福田さんから、太陽光パネルで電源が取れる「ポータブルソーラー」を、私がいるサガフォンド村に送って使い心地や村の人たちの反応を調べてくれないか、とのお話をいただきました。

私はニジェルで、この縁を形にすることができれば、こんなにすごいことはない！と感じ、さらに「どうせやるなら」と、ネットカフェを作ろう計画を思いついたのです。

それまで、私は村で協力隊員の活動として主に「改良かまど」の普及活動を行っていました。それはそれで、従来のかまどよりは薪も少なく済むし、村人にとっては助かることなのですが、自分は日本でガス台を使って育ってその便利さを知っていて、電気のIHも普及している国から来て、土でつくる「改良かまど」を指導するって、「何か違う・・・」と思っていました。

「援助するときは、材料などが現地で手に入るものでなくては、あとあと故障したときなどに現地の人だけでは対応できない」という意見もあります。小学校の校舎などはそれにあてはまるように思います。

ただ、私は当時、自分は便利なものや、楽しい最先端のものが触れられる環境に育って、それを知っているのに、教えないのは、3歳の子供にはまだ味がわからなくてもったいないから高級なお菓子は大人が全部食べちゃおう、というような感覚に似ているような気がして、現地の人に失礼な気がしていました。

そして、私が住んでいたサガフォンド村周辺では、ヨーロッパやアラブ諸国からの援助がとても豊富で、村人も「もらえるのが当たり前」という考え方が染みついてしまっているところでした。村人は、私に会うたびに「ドネモアカドー！（何かくれ！）」と言ってくるし、校長先生や役所の人と一緒に何かできないか、と話していても、「金はいくら持ってこられるんだ？」「何を作ってくれるんだ？」と言われるのです。なので、その場だけでお金や物をあげる援助では、村人が自分たちで何かをしようというエネルギーをしぼませてしまう、やるなら村人が自分たちの力で、長く運営していけるものを、と考えていました。

さらに、サガフォンド村には中学校があり、周辺の村から優秀な生徒たちが集まってきます。ガーナやベナンなど、周辺国に出稼ぎに行った経験を持つ、若い世代の人たちもいます。ラジオやうわさ話しか情報源がないサガフォンド村で、インターネットができれば、あらたな情報の取得手段になり、さらに、若者たちが技術を身につけたり、新たに「村でこんなこともできる」という発想のきっかけにもなるのではと思いました。

こうしてネットカフェ計画を考えだし、図々しくも、パソコンなどの周辺機器も送ってもらうことを福田さんをお願いしたのでした。

はじめは、協力隊の活動としてネットカフェ計画をやっていこうと、JICAのニジェル事務所の担当の方に計画書を持っていき、説明をしたのですが、数か月の「検討期間」を経て返ってきたのは「ネットカフェは、お金を払ってネットを使う（消費する）のが村人であるため、“援助”ではない。JICAの活動としては認められない」とのことでした。ただ、「本来の活動に差しさわりのない範囲で、ネットカフェ計画をコモンニジェルさんと個人的に進めても構わない」ということでした。

それに加え「大きな計画だから、本来の協力隊としての活動がないがしろになってしまうのでは？」、「ネットカフェを作ることで、文字が読める人と読めない人の格差が広がり、余計村の貧富の差を大きくしてしまうのでは？」などなど、周囲から反対の声も聞こえました。

ただ、私は、特に国際協力の分野では「何が正しい」ということはないので、反対した人の意見も正しいところはある、けど私のやりたいことも正しい！というスタンスで、気にせず進めました。何より、改良かまどと違って、計画を考えるのがワクワクします。

具体的にネットカフェ計画を進めるにあたって、専門知識も技術もないので、同じ時期にコンピューター技術隊員としてニジェルに派遣された三浦さんに協力をお願いしました。三浦さんは、快く引き受けてくださり、ネットカフェの場所はどこにするか？、パソコンはどの機種にするか？、ソーラーパネルのつなぎ方は、防犯対策はどうするか？など、次々に課題を挙げ、さらにそれを解決し、ぐいぐいと計画を後押ししてくれました。

ネットカフェ開業も間近か、と思われた2010年10月、その三浦さんがソフトボールで球が当たり鎖骨を骨折。日本に緊急帰国してしまいました。少しの間、計画ストップか、と思われたものの、療養のために帰国していたはずの三浦さんは、日本で福田さんと会い、計画を進めてくれました。40日の療養を経て、コモンニジェルさんが調達してくださったネットカフェ用のパソコン3台を担いで、ニジェルに帰ってきました。

今度こそ、ネットカフェ開業秒読みか、と思われた11月、三浦さんがニジェルへ戻った1週間後の出来事でした。11月28日、ほかの隊員などと首都ニアメで食事会をしたあと、夜遅いので友人宅へ泊めてもらおうと、私はタクシーに乗りました。そこで事故に遭ってしまいました。

当時のことはまったく覚えていません。気がつく、息をするのも痛くて、あちこち痛すぎてどこが痛いかわからないという状態で、ニアメの病院のベッドにいました。ろっ骨や鎖骨、首の骨など数か所が折れ、内臓も脾臓や胆のうが潰れ、肺や肝臓も傷つき、体の内部で血がどんどん出ているという状態だったようです。ニアメの病院で応急処置の手術を受け、2日後、緊急輸送のジェット機で、パリの病院に運ばれました。パリの病院でさらに脾臓や胆のう摘出などの手術を受け、ICU と個室病棟での3週間の療養を経て、年の瀬に、日本に帰国しました。

日本に帰国したばかりのころ、自分で体も起こせず、貧血のため歩くのも10分くらいが限界というような状態でした。自分の任期である2011年の9月末までに、ニジェルに再び戻って、これまでやってきたことの続きができるようになることを目標に、しばらくは療養と体力回復に努めていましたが、1月に入って、JICA から「ニジェルに戻る可能性はない。任期を短縮する」との連絡があり、1月半ばに私の協力隊としての身分は終わりました。

事故に遭ったこともそうなのですが、任期が短縮になったことも、私は不思議と、「起こるべくして起こったこと」のような気がして、くやしさを、あの時こうしていれば、というような感情はありませんでした。すべての起きたことが、必然のような気がしています。

ネットカフェ計画も、実際の自分の目で、完成したお店や、村人たちの反応を見られないことは残念ではありますが、一番大事なことは、「私が現地で計画を成し遂げること」ではなくて、「計画が実現することによって、村人の利益になること」です。だから、それは必ずしも私が現地にいなくてはなしえないことではないと思っています。

うれしいことに、三浦さんをはじめ、近くの村で活動する同期隊員などが、計画を現地で引き継いで進めてくれると申し出てくれました。こうして、今も計画が継続され、いよいよ、今度こそ、実現間近となっているのです。

福田さんは、私の思いつきのようなこの計画の当初から、おもしろいね！と言ってくださり、計画実現のためにたくさんのご尽力をしてくださいました。本当に感謝してもしつくないほど、感謝しています。

村のネットカフェが誕生して、村の人たちがもし「インターネットでビジネスのチャンスをつかんだ！」とか、サガフォンドの中学生がこれをきっかけにコンピューターをさらに勉強したいから留学することにした、とか、ニジェールの情報通信技術の革新が起きて、それがサガフォンド出身の若者だった！とか、そんな話が将来聞くことができれば、これほどうれしいことはありません。

また、それが、数々の偶然の積み重ねで生まれたこの縁が、「このためにつながったことだったのか」と、実感できる瞬間なのだと思います。

そんな日が、近い将来訪れることを願って。

2011年2月16日

牧野 佐千子